

103) 栗泥棒

井上君はオイラの悪事にはたいてい同行していて、栗泥棒にもよく一緒に行った。しかし栗は高いところに生っていることが多かったので、傘の柄でとるわけには行かない。たいてい物干し竿のように、かなり長い竹竿の先を少しばかり裂いて、そこに割箸をはさんで裂け目を少し広げ、針金でこの割箸を固定し、同時に竹竿の裂け目が下のほうに広がらないようにしっかりと固定して、これで栗の小枝をはさんでとるのである。ところが栗の木があるところには下に小川が流れており、せつかく栗を取ってもこの川に落ちてしまい、みすみす取り損なうことが多かったから、井上君が魚取りの網を持って待機し、川に落ちた栗を咄嗟に拾い上げる段取りになっていた。最初のいくつかはうまくいったが、ナニを勘違いしたか、井上君は栗の木の梢の方に気を取られていたとき、栗の実が井上君のオデコを直撃してしまった。井上君は一瞬悲鳴を上げたが、見る見るおでこはミミズ腫れになり、見るも痛そうになってしまった。そこへ農家のオッサンが「この泥棒ガキが〜」と、わめきながら追い駆けて来たから、オイラも井上君も一目散に逃げて家まで走ってきた。ところがこの一走りで、井上君のオデコの腫れはどんどんひどくなってしまい、ついに救急車のお世話になることとなってしまった。かくて栗泥棒も柿泥棒と同様に、惨めな結末を迎えたのであります。